

短期交換留学生受入れのための態勢と 学習環境の充実へ向けて —インタビュー調査をもとに—

奥村圭子・長谷川千秋

要旨

本稿では、2007年度に在籍中の短期交換留学生を対象としてインタビューを行い、学生が勉学・教育をどのように捉えて感じ、評価しているか、その実態と変化の分析を行なった。履修科目の種類や理解度、感想、要望などもさまざまであったが、前期には日本語学習と実技系科目に関する授業の内容や学習環境に対する感想が多かったのに対し、後期には日本人学生と教室活動を行なう共通科目や専門科目などに挑戦し、前期の気づきをもとに目標を設定し達成したり、自己の学びに対する内省を含むコメントや学習ストラテジーが出される傾向が見られた。彼らが求める勉学生活のためには、留学前の準備、日本語能力、そして留学後の真摯な勉学も重要であるが、本学における指導教員からの適切な助言、授業での日本人学生や留学生同士のサポートなども欠かせないことが判った。調査によって、受入れ大学として国際化を図る態勢や学習環境をより充実させるための課題が明らかとなり、それらに対する提言を行なった。

キーワード：短期交換留学、受入れ態勢、学習環境、日本語能力

1. はじめに

短期留学とは、「主として大学間協定等に基づいて母国の大学に在籍しつつ、必ずしも学位取得を目的とせず、他国の大学等における学習、異文化体験、語学の習得などを目的として、概ね1学年以内の1学期又は複数学期、他国の大学等で教育を受けて単位を修得し、又は研究指導を受けるものであり、その授業形態は母国語又は外国語で行われるものをいう」¹と定義されている。2003年の第5回中央教育審議会分科会留学生部会資料²では、その受入れの意義を、1)大学の国際的連携と拠点の形成、2)教育・研究の国際化と活性化、3)有能な人材の受入れ、4)人材育成という国際貢献、としている。

文部省(現在の文部科学省)は、「短期留学推進元年」と言われる1995年より積極的に短期留学の推進をし始めたが、以降「短期留学生受入れ特別プログラム(通称「短プロ」)」を設置する大学も徐々に増えている。現在27の国立大学法人が、主に英語で教育する科目を一定数揃えて学生交流協定校からの学生に提供している³。このような大学では、「日本について学ぶ」か

¹ 外務省のウェブサイト<http://www.studyjapan.go.jp>の「短期留学」の定義による。

² 「大学等の国際化・国際競争力の強化のための短期留学の推進について」(2003)中央教育審議会大学分科会留学生部会(第5回)資料5を参照。

³ 文科省採択事行平成18年度大学教育の国際化推進プログラム(海外先進教育実践支援)の「英語で開講する授業の国際水準化支援事業—短期留学プログラムの授業を手本にして国際的教育能力の向上を目指す—」の研究概要を参照。

ら「日本において学ぶ」に視点を変えた留学生教育が試みられている。井之川(2001)の指摘するように、日本留学のための日本語習得の負担が軽減されることで、通常の講義を受講するには不十分な日本語能力の学生にも道が開かれ、大学も多様な専門分野への受入れが可能となってきた。しかしながら、その実施上の様々な問題点については、協議会等で論議されている(花見・西谷 1997)。

山梨大学では「短プロ」の導入は行なわず、2003年度の留学生センターの設置以降開講されたレベル別の日本語クラスや日本語関係科目を提供しながら、既存のシステムの中で短期交換留学生を受入れている。これは、短期留学生であっても、可能な限り日本人学生と共に日本語を媒介語とする少人数教育環境の中で学んでもらいたいという大学の理念による。既存のシステムの中で受入れるとはいえ、各協定校のさまざまなプログラムより派遣されてくる学生は、専門分野、来日前の日本語学習時間、日本語能力、これら全てが多様であるため、大学間の綿密な調整が必要であり、受入れ学部の指導教員の負担も大きい。このように、大学としても日本人学生にとっても、受入れの意義が大いに期待される状況の中にあって、本学の現状と理念を確認し、評価する必要がある。

短期交換留学生の増加が予想される現在、モイヤー(1987)が指摘するように、留学生生活体験の内容と質が何より問われよう。勉学面でも日本語能力が原因で大学生活への不適応が生じる可能性も予想されるため、本紀要の長谷川・奥村(2008)(以後、別稿と呼ぶ)で紹介した、在籍中の短期交換留学生とのインタビューをもとに、本稿では勉学・教育面に関して学生の立場からの実態調査の分析を行なった。それによって、学生たちは、受けている教育をどのように評価しているのかを知り、大学として国際化を図る受入れ態勢と学習環境の充実に向けての課題提起を行ないたい。さらに、本学で果たして「短プロ」の導入が必須か否かについても言及する。

2. 調査対象者と調査方法

山梨大学では、現在7か国14大学と大学間交流協定を締結している。このうち山梨大学または交流協定校の学部レベルの約1年の授業料相互不徴収に則った短期交換留学制度が適用されているのは5か国5大学である。2007年度はこの5大学より開学以来最高人数の15名を受入れている。

調査方法の詳細は、別稿を参照いただきたい。前期来日の留学生10名(Aグループと呼ぶ)に対しては2007年7月に1回目、11~12月に2回目のインタビュー調査を行ない、その間の状況や意識の変化を観察する。後期来日の留学生5名(Bグループと呼ぶ)に関しては、来日後2か月から2か月半が経過した12月に調査を行ない、到着後間もない時点で必要なサポートについて考える資料とする。本稿では、全13項目のうち別稿で扱った項目⁴を除き、勉学・教育面に関わる3)来日前の日本語の学習・来日後の日本語力・現在の日本語力、及び6)前期、及び後期の履修科目について取り上げる。

調査対象者15名をAグループのA①~A⑩の10名、BグループのB①~⑤の5名とし、送出

⁴ 長谷川・奥村(2008)のp13を参照

し大学名はOからSで表し、個人の日本語学習歴と学習方法、専攻分野を表1-1と表1-2に示す。授業時間数は機関、学年によって幅があり複雑なため個別には記していないが、高等学校での外国語科目としての日本語授業は週1～3時間、送出し大学で選択科目として教えられる場合は週1～3時間、必修科目の場合には週3～6時間ほどの自習の時間を除く対面式の授業の時間が充てられている。

表1-1 A グループの背景

	大学	これまでの日本語学習歴、及び学習方法	自大学での専攻分野
A①	O	大学の選択科目日本語1年	メディア・インフォーマティクス
A②	O	独学・大学の選択科目日本語1年	遺伝子学／スポーツ科学
A③	P	独学・大学の必修科目日本語2年・日本人の友人から・インターネットでニュースなどを聞いて	法律／国際学(日本)
A④	P	高等学校で外国語科目として6年、大学の必修科目日本語2年・日本の歌から・日本人の友人から	国際ビジネス・会計学／国際学(日本)
A⑤	P	高等学校で外国語科目として2年、大学の必修科目日本語2年・日本人の友人から	法律／国際学(日本)
A⑥	P	大学の必修科目日本語2年・自国の日系企業の研修参加経験から	ビジネス／国際学(日本)
A⑦	P	独学・大学の必修科目日本語2年・日本人との交流会	ソフト・ウェア工学／国際学(日本)
A⑧	Q	大学の選択科目日本語2年・日本人の友人から・映画やアニメから	グラフィック・デザイン
A⑨	Q	独学・大学の選択科目日本語2年・日本人の友人との e-mail	放送／コミュニケーション
A⑩	Q	大学の選択科目日本語1年・日本人の友人から	コンピューター工学

表1-2 B グループの背景

	大学	これまでの日本語学習歴と学習方法	専攻分野
B①	R	高等学校で外国語科目としての授業3年・独学・大学の必修科目日本語1年・日本人との交流会	映画／日本語と現代文化
B②	R	独学・大学の必修科目日本語1年・日本人との交流会	都市計画／日本語と現代文化
B③	S	大学の必修科目日本語3年・日本の他大学へ短期留学1年	日本の言語・文学・文化
B④	S	独学・大学の必修科目日本語2年・日本人との交流会	日本の言語・文学・文化
B⑤	O	独学・大学の選択科目日本語1年・日本人の友人から	物理学

3. 調査内容、結果とその分析

本稿で扱う調査項目に則した調査票の質問を挙げ、Aグループ、Bグループごとに回答結果をもとに分析する。

3.1 日本語学習についての自己評価

留学当初と現在の日本語力について自己評価を聞いた。

【調査票】Ⅱ

4. あなたの留学当時の日本語の能力はどうでしたか

- (1) 聴く能力 (2) 書く能力 (3) 読む能力 (4) 話す能力

(5段階：1とても低かった 2やや低かった 3どちらともいえない 4やや高かった
5とても高かった)

5. あなたの現在の日本語の能力は留学当時に比べると

(1) 聴く能力 (2) 書く能力 (3) 読む能力 (4) 話す能力

(全く上達していない・あまり上達していない・どちらともいえない・やや上達した・
とても上達した)

表2は、留学当初の、聴く、書く、読む、話すの四技能の日本語能力について聞いたものである。5段階評価で「1と2の間」と回答した場合は1と2それぞれに0.5名として数えているため、端数が生じている。四技能のいずれかが留学当初「高かった」と評価した学生は、「聴く能力」で1名、「読む力」で3.5名、「話す能力」で1名いたのみで、「とても低かった」「やや低かった」という低めの評価をしている。特に「聴く能力」と「話す能力」についての評価が概して低い。

表3は、留学当初から調査時点までの間に、四技能がどの程度上達したと感ずるかを聞いたものである。全ての技能で「全く上達していない」という回答はなく、Aグループは「聴く」「書く」「読む」で「あまり上達していない」が1名ずついるものの、全般に「どちらともいえない」「やや上達した」といくらかの上達を評価しており、さらに2回目には全技能について「上達した」とする回答が少しずつ増えている。留学後、2回目の調査までの5か月ほどの授業を通して日本語を集中的に学んだことと、大学生活や日常生活の中で日本語との接触が増え

表2 留学当初の日本語の評価（平均）

技能	自己評価	Aグループ 1回目	Bグループ
(1) 聴く	とても低かった	2.5	2
	やや低かった	5.5	1
	どちらともいえない	1	2
	やや高かった	1	0
	とても高かった	0	0
(2) 書く	とても低かった	2	0
	やや低かった	3	1.5
	どちらともいえない	5	2.5
	やや高かった	0	0
	とても高かった	0	0
(3) 読む	とても低かった	2	0
	やや低かった	4	1
	どちらともいえない	3	1.5
	やや高かった	1	2.5
	とても高かった	0	0
(4) 話す	とても低かった	1.5	0.5
	やや低かった	7	3.5
	どちらともいえない	1.5	0
	やや高かった	0	1
	とても高かった	0	0

表3 日本語の上達度の評価（平均）

技能	自己評価	Aグループ 1回目	Aグループ 2回目	Bグループ
(1) 聴く	全く上達していない	0	0	0
	あまり上達していない	1	1	2
	どちらともいえない	1.5	1	1
	やや上達した	6.5	5	2
	とても上達した	1	3	0
(2) 書く	全く上達していない	0	0	0
	あまり上達していない	1	0	0
	どちらともいえない	3	2.5	2.5
	やや上達した	6	7	2.5
	とても上達した	0	0.5	0
(3) 読む	全く上達していない	0	0	0
	あまり上達していない	1	0	0
	どちらともいえない	1	1	2.5
	やや上達した	8	7.5	2.5
	とても上達した	0	1.5	0
(4) 話す	全く上達していない	0	0	0
	あまり上達していない	0	0	1.5
	どちらともいえない	4.5	2.5	1.5
	やや上達した	3.5	4	2
	とても上達した	2	3.5	0

ていることが影響していると言えよう。特に「話す能力」では、「とても上達した」という評価が3.5名から出ており、話す力の上達を日々実感していることが判った。

留学当初A①、A⑧、A⑨は、「話す能力」を「やや低い」と評価していたが、5か月後の2回目には「とても上達した」と語っている。一方で「書く能力」は「とても上達した」と答えた学生が比較的少なく、書くことには自信がもてない傾向にあることが判る。また、全体的に1回目の調査時点の上達度に比べ、2回目の調査時はその上達率が緩やかであると言える。これは集中型のコースで急速に語いや文法の吸収が増えた前期に比べ、後期にはそれほどのインパクトを感じなくなったからではないだろうか。一方のBグループは、来日から2か月ほどしか経過していないせいか、「聴く能力」「話す能力」について「あまり上達していない」「どちらともいえない」と厳しく評価している回答が半数以上で、まだ著しい上達の自覚は得られていないようである。これからの上達が期待される。

3.2 授業の履修状況、難易度、出席状況について

【調査票】Ⅳ

1. 1) 前期の履修に関して、次の(1)～(3)の間に答えてください。
 - 2) 後期の履修に関して、次の(1)～(3)の間に答えてください。
- (1) 科目名 「」
 - (2) 日本語の難易度 (5段階: 1 とても難しい 2 少し難しい 3 どちらともいえない
4 あまり難しくない 5 全く難しくない)
 - (3) 出欠の実態 1) ほとんど出席 2) 2～3回の欠席 3) 4回以上の欠席 4) 途中で辞退

ここでは、前期・後期の履修状況と、使用された日本語の難易度、そして出席状況について述べる。履修科目から留学生がどのような授業に出席しているかの傾向が表れるであろう。数値の端数は、回答が二つの段階の間であった場合それぞれに0.5と換算した結果である。実際の質問項目は上記のとおりである。

3.2.1 前期履修科目

日本語および日本語関係科目

表4は前期履修科目のうち、日本語と日本語に関連する科目についてまとめたものである。

前期については前期に来日したAグループ10名のみの回答となる。まず、表中の授業科目の概要について説明したい。「研修コースⅠ」⁵とは、留学生センターが提供する入門～初級レベルの日本語集中コース(週12コマ/15週間)で、単位認定は行っていない。「日本語初中級ⅠA」⁶「日本語初中級ⅠB」は、学部留学生が外国語科目として履修する日本語科目である。学期初めのプレースメント・テストによってクラス分けを行ない、適当なレベルを勧めている。学部留学生向け日本語科目には、初中級から上級までの4レベルのクラスに加え、アカデミッ

⁵ 「研修コース」に関しては、「Ⅰ」と後述の「Ⅱ」はレベルを示す。

⁶ 学部生向け日本語科目、例えば「初中級ⅠA/ⅠB」の「Ⅰ」は、前期科目であることを表す。なお「Ⅱ」は後期科目であることを表す。通常科目最後のAもしくはBは、同じレベルであるが内容が異なるものを示す。

表 4 前期の日本語および日本語関係科目における日本語難易度と出席状況

	科目名	研修コース I	A 日本語初中級 I	B 日本語初中級 I	日本事情 I	異文化間コミュニケーション A
使用日本語難易度	1 とても難しい	0.5				
	2 少し難しい	1				1
	3 どちらともいえない	1				
	4 あまり難しくない	2.5	1	1	1	1
	5 全く難しくない	3	1	1	1	
出欠の実態	1) ほとんど出席	7	2	2	2	2
	2) 2～3回の欠席	1				
	3) 4回以上の欠席					
	4) 途中で辞退					

ク・スキルを養うことに重点を置いた「日本語演習」があるが、前期には「初中級」のみが履修されている。日本語関係科目である共通科目「日本事情 I」は、留学生と日本人学生が日本の社会や文化について学ぶ科目である。また、「異文化間コミュニケーション A」も留学生と日本人学生が共に教室活動を行なう共通科目であるが、後期の「B」は受講生を入れ替えて行なうため、前期に履修した場合には再び履修出来ない規定となっている。この二つの共通科目は内容的な難易度を考慮して、短期交換留学生については初中級レベル以上の日本語能力を持っていることを履修の要件としている。

Aグループ10名の日本語科目の受講の状況は、「研修コース I」を受講する者が8名、そして中等教育機関から日本語教育を受けていたA④とA⑤が「日本語初中級 I A」と「日本語初中級 I B」を受講している。

使用されている日本語の難易度は、「研修コース I」では「難しくない」と感じた回答が多くはあるものの、「難しい」とするものもある。内容的な難しさが影響してそう感じているのかもしれない。クラス内にレベル差があったことも、印象が割れた要因かもしれない。このレベル差は留学前に受けてきた日本語教育の質、及び量の差によるところが多い。また、「異文化間コミュニケーション」は、日本語で書かれた資料などを事前に予習することや日本人学生とのディスカッションやプロジェクト活動が含まれるため、「少し難しい」と感じたという回答があった。

全科目の出席状況は「ほとんど出席」または「2～3回の欠席」ということで、良好である。

日本語関係科目以外の科目

次に日本語科目以外の日本語難易度と出席状況を表5に示す。

受講科目の種類は、外国語科目の「中国語初級」、専門科目の「共生社会外国書講読」、共通科目の「幼児の発達と教育」、芸術系の「書写演習」「歌曲を歌おう」「感性による造形」、そして体育系の「生活と健康」である。「外国書講読」は、経済学関係の英書を翻訳しつつ学ぶものであるが、履修したA④、A⑤は共に、経済用語に戸惑い日本語面で苦労したようである。A⑦が履修した「幼児の発達と教育」は日本語で行なわれる純粋な講義形式の授業であったため、使用されている日本語の難しさと特限目の開始時間に間に合わぬことが続き、途中で断念したとのことであった。体育系では「英語による説明もあり、助けとなった」が、芸

術系の科目では「少し難しい」という回答が見られ、説明の中の専門用語がわからず難しさを感じたようだ。

表5 前期の日本語関係科目以外における日本語難易度と出席状況

	科目名	中国語初級 I	読 共生社会外国書講	幼児の発達と教育	書写演習 I	歌曲を歌おう	感性による造形	生活と健康(テニス)
使用日本語難易度	1 とても難しい			1				
	2 少し難しい		2				1	
	3 どちらともいえない				1			
	4 あまり難しくない							1
	5 全く難しくない	1			1	1		
出欠の実態	1) ほとんど出席	1	2		2	1		1
	2) 2～3回の欠席							
	3) 4回以上の欠席						1	
	4) 途中で辞退			1				

しかし、出席状況をみると、講義形式のものを除けば概ね良好である。学生によっては、出席している日本人学生と友人になり、説明が分からない時は「説明してもらおう」や、「人のやっていることを真似すればよい」などの方略を語ってくれた。

続いて表6は、日本語科目別に個人の履修科目を挙げたものである。前期に研修コースIを履修した学生8名のうちA⑦のみが、実技系科目と講義形式科目を履修している。一科目を途中で断念することになったものの、実技系科目では日本人との交友関係が築け、授業中も彼らのサポートを得たことである。A④とA⑤は同じ大学から派遣されているが、共通の科目をいくつか履修し、課題の復習など共に取り組んだそうである。クラスの中での協力者の存在を必要だと感じているようである。

表6 前期の日本語科目別日本語以外の科目履修状況

日本語科目	学生	日本語以外の科目履修
研修コースI	A⑦	幼児の発達と教育、生活と健康、感性による造形
日本語初中級IA、B	A④	日本事情I、異文化間コミュニケーションA、中国語初級I、書写演習I、共生社会外国書講読
"	A⑤	日本事情I、異文化間コミュニケーションA、書写演習I、共生社会外国書講読、歌曲を歌おう

3.2.2 後期履修科目

日本語および日本語関係科目

表7は後期履修科目のうち、日本語と日本語に関連する科目について、使用される日本語の難易度と出席状況をまとめたものである。後期履修科目については、前期からのAグループ10名に加え、10月来日のBグループ5名も加わり、15名が回答している。科目ごとにA、B両グループの回答数を示している。

授業科目について説明したい。「研修コースII」は、初中級～中級レベルの日本語集中コース(週9コマ/15週間)であり、単位認定は行なっていない。後期も、初級レベルの「研修コースI」が開講されており、後期開始時には「研修コースII」に参加していた2名が8週目か

ら「研修コースⅠ」に教員の勧めに沿って移っている。

その他の13名の日本語科目の受講の状況は、「研修コースⅡ」7名、「日本語初中級ⅡA」3名と「日本語初中級ⅡB」1名、そして「初中級ⅡA」に出席している学生2名が文法にも力を入れたいということで、更に「日本語中級ⅡA」と「日本語中級ⅡB」を受講している。他大学への留学経験もあるB氏は、「日本語中上級Ⅱ」と「日本語演習B」を受講している。また、「日本事情Ⅱ」を履修している者が4名と増え、「異文化間コミュニケーション」を履修している者は前期と同じく2名であった。

表7 後期の日本語および日本語関係科目における日本語難易度と出席状況
(A: Aグループ B: Bグループ)

科目名	研修コースⅠ		研修コースⅡ		日本語初中級ⅡA		日本語初中級ⅡB		日本語中級ⅡA		日本語中級ⅡB		日本語中上級Ⅱ		日本語演習B		日本事情Ⅱ		異文化間コミュニケーション		
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	
使用日本語難易度	1 とても難しい																				
	2 少し難しい			2														1			
	3 どちらともいえない				1																
	4 あまり難しくない	1	1	2	1	1		1	1	1			1		1	2	1	1	1	1	1
	5 全く難しくない			1	1		2			1	1										
出欠の実態	1) ほとんど出席	1	1	2	1	2		1	2	2			1		1	3	1	1	1	1	
	2) 2～3回の欠席			1	3	1	1														
	3) 4回以上の欠席																				
	4) 途中で辞退																				

日本語の難易度については、日本語科目では「研修コースⅠ」の修了者が多い「研修コースⅡ」について「少し難しい」「どちらともいえない」と回答した者が3名で、前期の研修コースⅠに比べ若干増えているが、これは使用言語としての日本語レベルと共に、内容のレベルが上がったことに因ると思われる。しかし、「あまり難しくない」「全く難しくない」という回答も他の5名から出され、ある程度の日本語理解は得られていると言える。また、「日本事情」を履修している4名のうち1名が「少し難しい」と感じているが、授業内容の理解のために「書く」、「読む」という作業が多いため、予習、復習に励んでいるとのことだった。

日本語、および日本語関係科目の出席状況については、全て「ほとんど出席」「2～3回の欠席」という回答である。研修コースが週4日のコースであることを考えれば欠席率は5パーセント以下であり、日本語関係の学習については熱心であると言える。

日本語関係科目以外の科目

後期の日本語関係科目以外の科目のうち、講義形式の科目の日本語難易度と出席状況を表

8-1に、実技を中心とする科目については表8-2に示す。また表9には、後期の日本語科目別個人の科目履修状況を示す。

表8-1、8-2が示すように前期に比べ、全体的に履修科目の数が大幅に増え、科目の分野也多岐に亘っている。Aグループでは、前期に集中的に培った日本語力を実際に運用しようと挑戦する学生の様子が窺える。Bグループも、講義形式の授業、実技系の授業いずれをも積極的に履修している。受講科目の種類は、体育系の「テニス」「アウトドア・スポーツ」、芸術系の「書写演習」「陶芸」、などに人気がある。その一方で、全て講義形式の「日本史を学ぶ」、語学系の「英語C(英語による授業)」「中国語Ⅱ」、社会科学系の「国際関係論」、文学系の「日本文学作家論」、「日本文学作品論」など、前期に比べて日本語による講義を中心とする科目の履修が増えている。講義を主とする科目は、前期から来日の留学生も、後期に加わった学生も同様に履修している。後者にはB③のように日本語力が比較的高く、自大学での専門分野の科目を本学でも履修し、研究に活かしたいという目的をもっている学生もいる。体育系ではあるものの日本語による講義が半分以上を占める「バイオメカニクス論」「運動の効果」「生活と健康Ⅱ」の各科目は、理論を学ぶ際の日本語の難易度は高かったとのことで、それが出席状況に多分に影響していると言えよう。

また、専門科目である「プログラミング」やゼミ形式の「地域経済論基礎演習」に留学生1名で参加する学生がいるのは頼もしく感じる。これらの学生は共に、日本人学生と接触するいい機会であるからと指導教員より勧められ、履修に至ったと語っていた。自国である程度理論を学んできていたため、違和感なく授業に入っていたと言う。これは正に「日本について学ぶ」のみならず、「日本において学ぶ」を実践しているケースであると言えよう。

表8-1 後期の日本語関係科目以外（講義形式）における日本語難易度と出席状況
(A: Aグループ B: Bグループ)

科目名	中国語初級Ⅱ		英語C(中級)		地域経済論基礎演習		国際関係論		日本史を学ぶ		日本文学作品論		日本文学作家論		プログラミングⅡ		競技スポーツのバイオメカニクス論		運動の効果	
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
使用日本語難易度	1) とても難しい				1				1		2				1					
	2) 少し難しい						1					1								
	3) どちらともいえない						1													
	4) あまり難しくない		1										1						1	
	5) 全く難しくない				1															
出欠の実態	1) ほとんど出席				1		1		1		1		1		1				1	
	2) 2～3回の欠席		1		1								1				1			
	3) 4回以上の欠席										1									
	4) 途中で辞退																			

表 8-2 後期の日本語関係科目以外（実技系）

科目名	書写演習Ⅱ		陶芸		生活と健康Ⅱ(バスケット・バレ)		生活と健康Ⅱ(エアロビ、ダンス)		スポーツと健康Ⅱ(テニス)		アウトドア・スポーツⅡ	
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
使用日本語難易度	1 とても難しい				1		2					
	2 少し難しい					1					1	
	3 どちらともいえない			1		1					1	
	4 あまり難しくない	2			1		1		1		1	
	5 全く難しくない	1	1	1								
出欠の実態	1) ほとんど出席	1	1	1		1		1				
	2) 2～3回の欠席	2		1			2	2			1	
	3) 4回以上の欠席					1					1	
	4) 途中で辞退										1	

日本語難易度については、「とても難しい」「少し難しい」と回答する科目と、「あまり難しくない」「全く難しくない」と回答する科目とに評価が分かれた。概して専門用語を含む日本語による説明の多い科目では、理解しづらいと感じているようである。出席状況は、「アウトドア・スポーツ」で「途中で辞退」という学生がいるものの、多くは「ほとんど出席」「2～3回の欠席」で参加し続けており、日本語の難易度はある程度高くとも、何らかの動機を保ちながら積極的に授業に臨んでいる学生

も多い。積極性や目的意識を持ちながら授業に臨む学生は、出席率も概して良いようである。

同じ大学からの学生A⑧、A⑨、A⑩は、1年を通して日本語科目以外の科目は一切履修していない。2名は、「自大学では、日本語は選択科目で授業時間が少なかったため、その分日本では日本語学習に集中したかった」と述べていた。1年に亘って日本語を集中的に学ぶコースの提供も、彼らの希望と合致したと言える。とはいえ、授業の中で日本人と接触がもてなかったのは何とも遺憾である。もう1名は、「サークル活動やアルバイトに授業以外の時間を使いたかった」と理由を述べている。

表 9 後期 日本語科目別 日本語以外の科目履修状況

日本語科目	学生	日本語以外の科目履修
研修コースⅠ	B④	中国語初級Ⅰ、英語C(中級)、日本文学作家論、日本文学作品論
"	A⑨、B⑤	なし
研修コースⅡ	A①	アウトドア・スポーツⅡ(途中で断念)、生活と健康Ⅱ
"	A③	生活と健康Ⅱ
"	A⑥	生活と健康Ⅱ
"	B①	生活と健康Ⅱ
"	B②	生活と健康Ⅱ
"	A⑧、A⑩	なし
日本語初中級ⅡA、ⅡB	A⑦	日本事情Ⅱ、異文化間コミュニケーションB、書写演習Ⅱ、アウトドア・スポーツⅡ、プログラミングⅡ、生活と健康Ⅱ
日本語初中級ⅡA、日本語中級ⅡA、ⅡB	A④	日本事情Ⅱ、書写演習Ⅱ、地域経済論基礎演習、国際関係論、陶芸
"	A⑤	日本事情Ⅱ、書写演習Ⅱ、陶芸、生活と健康Ⅱ
日本語中上級Ⅱ、日本語演習B	B③	日本事情Ⅱ、異文化間コミュニケーションB、書写演習Ⅱ、日本文学作品論、日本史を学ぶ
日本語科目無し	A②	アウトドア・スポーツⅡ、スポーツと健康Ⅱ、運動の効果、競技スポーツのバイオメカニクス論

もう一点、Aグループには後期に日本語科目を履修していない学生が1名(A②)あった。この学生は山梨大学で専門分野の研究ができる講座と出会い、後期は出来る限り時間を卒論研究に充てるため、関連の専門科目と論文作成に取り組んでいるとのことであった。論文指導は、英語を補助言語として受けている。学部生の場合、研究留学という形は今までにはない形態であるが、指導教員によってはその受入れも可能であるという、新しい方向性を示す例である。

前期・後期を通して在籍しているAグループの受講科目の分布を見ると、特に前期に日本語科目、日本文化を体験できる実技系科目を多く選択する傾向が見られる。日本語力を伸ばしつつ、言語の壁がそれほどない実技系科目を好んで履修するのである。しかし実技系でも、英語での語彙説明が多少加えられたとしても、日本語での講義が含まれると難しいと感じる留学生が多い。それに比べ、後期においては、日本語力も高めつつ、専門分野に挑戦しようとする姿が顕著になっている。特に社会科学系、文学系の授業では、使用される日本語が「とても難しい」「少し難しい」と困難さを感じているのだが、出席状況にも現れているとおり、それでも積極的に学びたいという意欲が感じ取れる。授業に首尾よく参加していくためには、それ相応の日本語能力が必要であり、個人の予習・復習が要求されるであろうが、同時に教員の配慮、支援、そして日本人学生や留学生仲間の助力が必要不可欠であるようである。

3.3 授業を受講しての印象、感想、授業に対する要望について

ここでは、日本語関係科目の授業、及び日本語関係科目以外の授業についての感想を集めた。前期履修科目についてはAグループ10名に、そして後期履修科目についてはBグループ5名を加えた15名に下記の質問を問うた。

【調査票】IV

2. 1) まだ学期の途中ですが「日本語関係科目の授業」に関して、次の(1)～(3)の間に答えてください。
- 2) 「日本語関係科目以外の授業」に関して、次の(1)～(3)の間に答えてください。
 - (1) 内容は難しかったですか。

(5段階：1とても難しい 2少し難しい 3どちらともいえない
4あまり難しくない 5全く難しくない)
 - (2) 感想を聞かせてください。
 - (3) こうして欲しいと思っていることがありますか。それは何ですか。

3.3.1 前期履修科目

日本語および日本語関係科目

内容については、Aグループ10名中5名が「少し難しい」、5名が「あまり難しくない」、「難しくない」と回答した。

日本語、日本語関係科目の授業に出席した感想を自由に述べてもらった。その回答を以下に纏める。()内は回答者を示す。

<研修コース I >

- ◆ 進度が速い (A③、A⑨、A⑩)
- ◆ 1日3コマは多すぎるため、疲れて復習が追いつかない (A②、A⑧、A⑨)
- ◆ クラスの人数が多すぎる (A①、A②)
- ◆ クラスの人数は少し多いが、楽しい (A③、A⑦)
- ◆ 覚えること、宿題やテストが多く、大変だった (A⑦、A⑨)
- ◆ クラスの中でレベル差がある (A①)
- ◆ 1つの課の中で学ぶ量が多く、自大学からの課題がある時は苦労した (A⑥)
- ◆ 基礎固めは必要なので、速いと感じるが仕方がない (A⑩)
- ◆ 速度は速いが、他に授業を取らないようにしたので問題ない (A③)
- ◆ 日本語のクラスだけでは日本人の友達はできにくい (A⑦)
- ◆ 新しい文法事項をパターンで繰り返し覚えるのは、ついて行きやすい (A⑧)

<日本事情、異文化間コミュニケーション>

- ◆ 日本人学生と一緒に協力し合って交流するのはいい (A④)
- ◆ グループ・ワークでは日本人学生の中に積極的に取り組まない人もいて真剣さが足りないと思う (A④)

授業の進め方についての意見が多く聞かれた。「研修コース I」は週12コマの集中コースであるが、自国で週1時間から多くとも6時間の日本語の授業を受講してきた学生にとっては、量的にかなりの負担と感じるのであろう。特に自大学の学期の開始と終わりが日本の大学とは異なっているQ大学からの学生は、この数年到着が5月下旬で、合流した時点で既に学期に1か月半ほど遅れて参加することになり、「速度が速い」「量が多い」「テストや覚えることが多い」と不満をこぼしていた。しかし、進度が速いと感じながらも、「速いが研修コースだけしか取らないようにしたので」「基礎固めが大切なので」と、前向きな真摯な態度を示す回答もある。日本人学生との混成の授業科目では、初めて日本人学生と交わる授業の中で日本人との会話を楽しむと同時に、日本人学生の消極的な態度を理解できず戸惑っているようである。「戸惑った」と語った学生は、他の気の合う日本人学生1名とグループをリードしてプロジェクトを進めていったと語ってくれた。この学生の積極性は、日本人メンバーにも良い影響を及ぼしたことであろう。留学生受入れは日本人学生にも有意義な要素を多分に持つ制度なのである。

次に日本語関係科目の授業についての要望を自由に述べてもらった。「研修コース I」については、集中的なスケジュールであるため、負担を軽くして欲しいという声が多かった。留学時、もしくはコースの開始時に、このコースが後期の授業に備えて基礎力を高めるためのコースであることを詳しく説明し、ある程度の覚悟を持って臨んでもらうように、理解とレディネスの確認を求めると同時に、学生の様子を見ながら細かい調整をしつつ進めてゆく必要がある。

また、「日本人の会話パートナーが欲しい」(A②、A③)、「授業の中でももう少し話す練習を取り入れて欲しい」(A②、A⑥)、「友人と話せるよう、カジュアルな話し方を勉強したい」(A⑤)、そして「テストより人と話して勉強の成果を試してみたい」(A⑨)といった「話す」

練習に関する回答が多数挙げられた。コミュニケーションのために練習をしたいという意欲が表れている。コースでは、特別に会話のクラスを設けることは出来ないが、今後毎日の授業にできるだけ会話練習を含めることで対処してゆきたい。

日本語関係科目以外の科目

ここでは、日本語関係科目以外の科目についての感想、要望について述べる。

前期に学部生向け科目を履修していたのは10名中3名(A④、A⑤、A⑦)であった。内容の難易度に関しては、語学科目、実技系の「書写演習」「歌曲を歌おう」「生活と健康」など実際に実技を見ながら参加できるものに関しては内容を「あまり難しくない」「全く難しくない」と評価しており、日本語で理論を学ぶものに関しては、内容的にも「少し難しい」「とても難しい」と感じている。日本語の難易度とほぼ一致していると言える。

それらに出席しての感想を述べてもらったところ、「面白かった」(A⑤)、「日本人と共に授業を受けることが出来、友人が増えた」(A⑦)、「隣の人を見ながらやっていたら授業に付いていけた」(A⑦)、と日本人学生の助けを借りながら授業参加を楽しんでいる様子が窺える。社会科学系の「外国書講読」を履修した学生は、「要約を書かなければならないことが日本語力のアップに繋がった」「授業の内容が自大学での専門と関連があり、勉強になった」(A④)と内容の難易度が高い授業に苦労しながらも、参加が意義深いものであったことを語ってくれた。また、「書道の理論はわからなかったが、日本人に倣って書くのはとても楽しかった」(A④)、「実技を伴わない授業では日本人の友達がいなくて難しい」(A⑦)といい、日本人学生の存在とその助力が彼らの内容理解の大きな鍵となっていることが判る。同時に「自分へのサポートで他の学生に迷惑がかかっている」(A⑦)と日本人学生を気遣う声も聞かれた。

それらの日本語関係科目以外の科目に対する要望、もしくは希望については、「後期には是非、工学系の授業をとりたい」「先生に授業の内容をプリントにしてもらっては迷惑だろうか」(A⑦)、「もっと日本文化や習慣について学びたい」(A⑤)、「英語で学べる専門科目を提供して欲しい」(A①)といった声が聞かれた。

もともとソフト・ウェア工学が専攻の学生であるA⑦は、日本語力を上げて後期に工学部の専門科目の授業に備えるようにと、指導教員にも勧められているとのことだった。この学生は授業での教員のサポートを願いながらも、同時に負担をかけることを案じている様子である。教員の負担がそれ程でないならば、紙媒体での情報は学生の内容理解に大いに役立つに違いない。また「英語での授業を」と願う回答が1名からあった。この学生の言う授業とは工学系の専門分野のものである。英語を媒介語とする授業についてはこれまでも検討されたものの、実現には至っていない。学部の協力を得て、専門科目、及び日本文化・社会に関して日本人学生と共に英語で学ぶ基礎的な授業科目を少しずつ開発できればと願うところである。そのほか滞在期間が限られている短期交換留学生を対象に、留学生センターでは様々な日本文化紹介の機会も増やしていくよう計画中である。

3.3.2 後期履修科目

日本語および日本語関係科目

前述したように、後期に関しては、前期からのAグループと新しく加わったBグループの計15名の学生に前期と同様の質問をした。

<研修コースⅠ>

- ◆ 語彙が多すぎる。数を限って何度も出てくれば覚えられるのに (A⑨、B④、B⑤)
- ◆ 進度が速いがなんとか付いていっている。パターン・プラクティスがいい (B④、B⑤)
- ◆ 毎週5人の先生が毎日交代しながら授業が進むので教え方も異なり、いいと思う (B⑤)
- ◆ 難しいが、自分のためになっている (B⑤)
- ◆ 英語で書かれた文法説明書があり、助かっている (A⑨)
- ◆ 研修コース(特に)途中から戻ったが、今回は問題なく付いていっている (A⑨)
- ◆ ある先生に子どものように扱われ、心地よくない (B④)

<研修コースⅡ>

- ◆ 漢字は書き順や画数やその漢字の意味が示されず、わかりにくい (A①、A③、A⑨、A⑩)
- ◆ 最初の教科書で扱っているトピックや語彙は日常的に使えない。アカデミック・ジャパニーズの色が濃い (A①、A③、A⑧)
- ◆ 漢字は難しいが面白い (A⑥、B④)
- ◆ インタビュー／アンケートのプロジェクトはとても有意義だった (A①、A⑥、A⑩)
- ◆ 授業の進度も量も丁度よい (B①、B②)
- ◆ 復習が必要なときにはサークルの日本人学生を捕まえて練習している (A⑧)
- ◆ 自分が必要なのは会話の練習だ (B②)

<日本語中級>

- ◆ 自国の大学に比べ、文法をたくさん学べるので書きことばは上達した (A④)
- ◆ 発音の練習に関してはもっと注意を払わなければならないと思った (A④)

<日本語中上級、日本語演習>

- ◆ 話しことば、書きことばの使い方の区別がわかるようになった (A③)

<日本事情、異文化間コミュニケーション>

- ◆ プリントが配布され、内容を確認することができるので、助かっている (A④、A⑦)
- ◆ 毎回、書く作業と読む作業が含まれているので日本語の上達にいい (A⑦、B③)
- ◆ プロジェクトのためにコミュニケーションをする中で、自分の意見が伝えられる (A⑦、B③)

後期の感想は前期に比べると、「研修コースⅠ」に関しては、不満が減り評価も上がっており、授業に対する学生の前向きな姿勢が窺われる。前期の調査結果を反映させ各教員が会話練習を取り入れる工夫をしながらも、前期に続き同じ教科書を使用しているが、クラスが少人数の構成となり学習環境としては望ましい状況が作られているのか、グループのラポール形成が円滑に行われているのも影響しているかもしれない。「研修コースⅡ」については、コースの内容や教科書についての意見も依然としてあるものの、自分の学習を振り返り、次の目標に繋がるような学習に関する自省やストラテジーが全体的に数多く出されているのが特徴的である。自己の日本語力についての評価なども頻繁に示された。

「研修コースⅡ」の教科書の選定と漢字教育については、学生の意見を取り入れた検討が必要である。このコースは本来大学院入学前の研究生向けの予備教育をも兼ねているため、研究生活や大学院の授業で使える「アカデミックな日本語」を念頭に教科書を選んだ経緯があった。インタビュー／アンケート・プロジェクトでは、キャンパス内の日本人学生からデータを集める作業の中で、培ってきた日本語力を駆使することによって、達成感を感じたのではないかと推測される。「日本事情」や「異文化間コミュニケーション」では、日本人学生とのディスカッションやグループ・プロジェクトを主な授業活動としているため、履修した学生は全員、実践の場を楽しみ、日本語力の伸長を確認できており、これが次への励みとなっているようである。

以上の科目に対して要望として挙げられたのは以下のとおりである。

「研修コースⅡ」に関しては、「日本人の学生と会話練習をしたい」（A③、A⑥、B②）、「日常的に使える語彙をもっと学びたい」（A③、A⑧）と、話すコミュニケーションを増やしたいという切実な思いは前期と変わらない。A③とA⑥は、前期にも同じ思いを語っており、それから2回目のインタビュー迄の5か月間にその問題が解消していないのは残念でならない。「研修コースⅡ」では会話の特化クラスを設けているが、授業中の設定ではない、授業外の日本人との会話を求めているのであろう。これらの学生には後期のインタビュー終了後、会話量を増やすべく、興味のあるスポーツのサークルへの参加することを勧めた。授業時間外でも日本人との接触場面を増やし、交友を広めることがその一助となることを願っている。

他には「聴解が弱いので、もう少し授業で取り上げて欲しい」（B①）、「説明はゆっくり話して欲しい。」（A⑥）、「自分の日本語レベルに合ったクラスがもう少し幅広くあるといい」（B③）などが出された。感想のところでも提示された、自己の日本語力を評価し弱点を客観的に捉えている学生（A④、B①、B②）からの意見は、教育の改善に大いに参考となる。教員側も学生が足りないと思う教室活動を授業に取り入れることと共に、自主学习教材の提供や補助教材の提言を行なう配慮をするよう改善が望まれる。また、幅広い日本語クラスの提供を望むB③には、日本語を媒介語として使いながら、日本語能力を上げていくことを提案したい。

日本語関係科目以外の科目

日本語関係以外の授業の内容の難易度については、授業によって評価が大きく異なった。実技系の日本語による講義を含まない授業を取っている学生（B①、B②）や得意な語学の科目を履修した学生（B④）にとっては「全く難しくなかった」「難しくなかった」となり、演習形式のものや専門科目の理論を講義形式で紹介する科目には「難しかった」「とても難しかった」が選ばれた。科目によっては「難しかった」、「難しくなかった」と、複数に回答した学生が4名あった。同じ「生活と健康Ⅱ（エアロビ・ダンス）」の授業でも、学生によって大きく評価が分かれているものもある。日本語運用力と回りの日本人学生とのコミュニケーションの量の違いによる結果であろうか。

また、日本語関係科目以外の授業に出席した感想を自由に述べてもらった。日本語関係科目以外でも「楽しい」あるいは「面白い」という回答が11名中7名からあった。その中で日本の文化に触れるものを「ユニークな、いろいろな形式の科目を履修できてよかった」（A⑦、B

③)と感想を述べている。また、「難しいが、日本語が上達しているのを実感し、専門科目も面白く履修してよかった」(A④、B③)と難易度は高く、ついていくのは大変であっただろうが、自己成長を評価している感想もある。知の探求を楽しむに至るかどうかは、日本語力に加えて授業に対して積極的に働きかける姿勢にも大きく左右されているのではないか。前期に「日本文化についてもっと学びたい」(A⑤)と語っていた学生も、後期に「日本文化について勉強できた」(A⑤、B③)と述べている。また、前期に「工学系の授業を取りたい」と願っていたA⑦は、指導教員の勧めどおり工学系の授業に参加し、「自大学で理論を学んでいたもので、工学系の科目では日本語の問題があまりなかった」(A⑦)と履修をして良かったと語っている。1年の留学の前半での気づきを後半で活かし、自己実現が叶っている例だと言える。

「授業で使われる日本語と内容自体が難しい」と語るB④は、診断されている日本語力では履修が困難な専門2科目について「試験や評価が心配だ」(B④)と述べている。指導教員の「参加は難しいのではないかな」という助言が事前にあったとのことだが、英語でのレポート提出が可能となるような配慮が望まれる。無謀なチャレンジより、楽しめる科目選択もあったのではないかと遺憾に思われる。指導教員と留学生センターの教員が学生の力に見合った履修科目について協力して助言できる態勢が取れるよう図りたい。

4. 考察

今回の調査では、調査対象者の意見の抽出が不均等であったことが問題の一つである。対象者によっては詳しく感想の理由まで問う一方で、口数が少ない対象者の場合には不十分な回答のまま次に移行したために、真意が掴めなかったものもある。しかし、2名の留学生センター教員が学生1名あたり90分ほど直接声を聞くことによって、普段伝わりにくい彼らの思いに接することが出来たことは貴重であった。協力的に参加してくれた留学生15名に感謝したい。現在なおシステムや学習環境に影響している課題や検討事項のうちから、2点を取り上げる。

4.1 交流協定校とのシステムの違いと協定内容の検討

山梨大学の学年暦では4月に一斉に授業が開始されるが、国によっては新学期が5月、9月、12月などで、学期の長さも異なる。Q大学からの学生は、到着時期が5月の下旬であるために新学期にかなり遅れ、準備不足のまま授業に参加をした。これが日本語科目の理解度や「進度が速い」「1日3コマは多すぎる」「課題が多くて大変」といった感想に繋がっていると考えられる。その結果、後期の途中から「研修コースⅠ」をもう一度復習してもらったことになった学生も出た。課題などの種類や量も自国とは異なるのかもしれない。教員側としても一貫した教育ができず、学生にとっても辛い学習経験となったのではなかろうか。また、Q大学からの学生は、日本語科目以外の履修が全くなかったのも記すべき特徴であった。到着時期を後期にすることも検討課題であろうし、5月の到着が動かせないとなれば、プレイスメント・テストを遠隔で行ない、科目の概要や教材を事前に送付し、準備を促すのも一案であろう。

交流協定校の選定の段階から考慮しなければならないのは、派遣される学生が留学に求めるもの、そして山梨大学が提供できるもの、その両者の一致ではないかと考える。日本語が選択

科目としてのみ提供されている提携大学、O、Q大学の学生は日本語学習で期待される学習量に対する認識が不十分な例もあり、日本語学習に非常に苦労していた。その上、いくら日本で学んでも、帰国後自大学で継続して学ぶ日本語の授業が用意されていない、と両大学の学生は語っていた。A①は工学系授業が英語で開講されるのを望んでいたが、それならばA②の学生の場合のように英語を補助言語、または媒介語とした研究留学も視野に入れた協定内容の再検討も必要ではないだろうか。

4.2 語学力と提供科目の問題

英国の一般的な大学の例を考えると、自国の学生と留学生を区別せず教育が施されているが、その前提として授業参加に十分な英語力をもっていることが要件となっている。本来、山梨大学が短期交換留学生受入れの理念を「日本語で開講されている授業を日本人学生と共に」とするならば、私費留学生と同様に、日本国際支援協会の実施する日本語能力試験で2級以上⁷の能力を求めなければならないであろう。しかし、遺憾ながら、記されている日本語レベルに関する文言は一部の協定書に「4級以上」とあるのみで、協定書に触れられていない場合も多い。日本人学生との交流授業を望む留学生の声が高いにもかかわらず、日本語能力がそれらに参加し得るレベルに及ばず、一年を通じて日本語学習中心の生活となる学生が多いのが現状である。履修科目の内容が本人の理解力を遥かに超えている場合も見られた。理想的には、坂野(2005)が「日常生活に困らない日本語力」と見なす日本語能力試験3級レベル以上の日本語力を持つことを要件とし、1学期目を日本語科目や実技系科目を中心に、2学期目を日本人学生と授業活動を共にする初歩的な専門科目や共通科目を中心にするのが、学生の思いと山梨大学の理念が十分に活かされる短期交換留学像ではないかと考える。

当面、指導教員と共に、学生の日本語力を知る留学生センター教員も助言をする態勢が取られるべきではないだろうか。実技系科目においても、授業での担当教員の支援ももちろんのこと、日本人学生や留学生同士の助力が期待される。しかしながら、本人の前向きなチャレンジ精神や勤勉さも留学生生活を意義ある実り多いものにする大切な要素であろう。

では、果たして「英語での授業」が、望ましいのであろうか。別稿の調査結果によると、留学生が掲げる目的の多くが「日本文化へ興味をもっており、体験し学ぶため」「日本語を学び、上達させるため」と語っている現実を考えると、必ずしも英語の授業ばかりを揃えることが求められているわけではない。短期交換留学生が他から隔離されるような「短プロ」という特別なプログラムを緊急に立ち上げなくとも、英語で教育される日本文化や社会に関する科目がいくつあれば、学生にとっても選択の幅が広がるであろうし、日本人学生や非英語圏からの学生の英語力伸長や教員の国際性の育成も期待できる。しかしながら、英語での授業の担当人員を確保し、英語開講科目を次々と設けるというわけにはいかない。ましてや、日本語で教育する科目を一定数揃えるという体制は、容易には整えられない状況である。まずは、既存の科目の中から、媒介語を英語に切り替えて教育できるよう、各学部へ協力要請をすることを今後の課題の一つとしたい。

⁷ 平成15年11月11日に出された法務省入国管理局「在留資格「留学」及び「就学」に係る審査方針について」には「学部生等で日本語による教育を受ける者にあつては2級相当以上」と記されている。

5. おわりに

本稿では、山梨大学に2007年度に在籍している短期交換留学生にインタビュー形式で勉学・教育面について自由に述べてもらった。提示された項目について各個人のさまざまな声を聞き、短期交換留学生の受入れに有用な情報が得られた。留学生たちは熱心に日本語の授業に出席しながらも、日本人との交流、会話、コミュニケーションを求めている。前期に日本語科目や実技系科目をとり、後期に共通科目や専門科目に積極的に挑戦している学生も多く見られた。一方では、日本語を研修コースで学ぶ学生は、日本人学生とのコミュニケーションの量は限られてはいるものの、日本語を集中的に学べる機会を前向きに捉えている。前期には授業の内容、使用テキストや学習環境についての感想が大半であったが、後期には個人の学習スタイルや能力伸長を目指すストラテジーを語る内省も多く見られた。これらの情報をもとに第4章では、交流協定校とのシステムの違いと協定内容の検討、語学力と提供科目の問題提起を行なった。協定校との協定内容の見直し、調整、相互の情報の交換、そして本学からの英語を媒介語とした科目の提供などが、取り組むべき課題であることを指摘した。

受入れ学生にとってよりよい学習環境を構築するために、留学生受入れの意義を問い直し、山梨大学の理念や態勢が本学内でも、協定校でも十分に理解されているか、それぞれの留学生生活が満足し得るものか、などの調査を今後も継続していく必要がある。

短期交換留学は、それを端緒として長期留学、大学院入学、さらに日本における就職へと繋がる可能性を含んでいる。有能な人材育成という国際貢献の一端を担い得る、また日本人学生へも多大なるプラスの影響を及ぼし大学文化の国際化の原動力となり得る彼らの留学生活の内容と質が確保されるよう、各学部とも密接な協力体制を組むことによって、留学生センターは積極的に関わってゆきたい。

参考文献

井之川睦美(2001)「短期交換留学生日本語コースの過去4年間の取り組みと今後の課題

—留学生受入れによりつくりだされる学習環境の共有—」『高崎経済大学論集』441, 107-121.

坂野永理(2005)「アンケート調査からみる外国人大学院生・研究生に必要な日本語」『岡山大学留学生センター紀要』12, 1-10.

中央教育審議会(2003)『新たな留学生政策の展開について(答申)』. 中央教育審議会大学分科会留学生部会.

長谷川千秋・奥村圭子(2008)「交換留学生の大学生生活についての意識調査」『山梨大学留学生センター研究紀要』3, 12-31.

花見慎子・西谷まり(1997)「教育の国際化と短期留学生受け入れプログラム」『留学生教育』2, 21-3. 留学生教育学会.

モイヤー康子(1987)「心理ストレスの要因と対処の仕方—在日留学生の場合—」『異文化間教育』1, 81-97. アカデミア出版会.